

ハイブリッド文法

—軽動詞 *have / give* の事例—

Hybrid grammar

—A case study of the light verbs *have / give*—勝部 愛美¹¹大妻女子大学Manami Katsube¹¹Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：軽動詞，コーパス，直観，重複，ハイブリッド文法

Key words : Light verbs, Corpora, Intuition, Overlapping, Hybrid grammar

抄録

これまで、英語における文構造の記述には主に、語からのアプローチと型からのアプローチが用いられてきた。本稿で提唱するハイブリッド文法は、語と型からのアプローチの利点を組み合わせ、さらにコーパスのデータと母語話者の直観を採用した文法の枠組みである。ハイブリッド文法を利用することで、軽動詞 *have / give* が目的語にとる事象名詞の特性を明らかにする。

1. はじめに

前稿 (勝部 2014)^[1] においては、ハイブリッド文法 (HG) の枠組みを提唱し、軽動詞 *have / take* と事象名詞の連語に関する考察を行った。本稿では、軽動詞 *have / give* を研究対象とし、HG を利用することで、*have / give* の特性を明らかにする。

2. 先行研究

軽動詞構文についての先行研究は多くあるが、本稿では軽動詞 *have* と *give* の連語について議論している Stein and Quirk (1991)^[2] と、*give* の統語的特徴に言及している木原 (2008)^[3] を概観する。

2.1. Stein and Quirk (1991)

Stein and Quirk (1991)^[2] は、15 のイギリス英語・アメリカ英語を含むコーパスを利用し、軽動詞の連語について議論している。扱う軽動詞は典型的なものに限定し、*make* や *do* などは対象から除外している。軽動詞の目的語に置かれる名詞に

関しては、対応する動詞と同形の名詞以外の名詞と、意味的に置き換えができ、熟語的なものは対象から除外している。また、*give* に関しては、二重目的語をとるものと、単一目的語をとるものは、統語的に異なるふるまいを見せるものと認定する。

- (1) a. He gave a sigh.
b. *He gave his brother a sigh.

(1) のように *sigh* を目的語に置く場合、*give* が単一目的語をとる(1a) のような例の場合は容認されるが、(1b) のように二重目的語をとる例では容認されないと主張する。そのため、この2つの *give* の構文を区別して扱っている。

Stein and Quirk (1991)^[2] は、*have / give* と共起する名詞の意味を以下のように分類し、頻度を示している。

意味グループ	典型的動詞	have	monotrans. give	ditrans. give
知覚	look	15	3	84
心的活動	think	2	-	-
言語活動	chat	11	-	-
食物摂取	sip	16	-	1
身体ケア	wash	4	-	-
接触活動	hug	-	1	17
身体活動	swim	9	1	7
一時的な動作	try	6	-	2
無意識的な反応	start	-	27	9
潜在的に意識的な反応	laugh	9	61	53
意識的な反応	shout	-	20	11

<表 1>

have は他の軽動詞より、《言語活動》や《身体活動》、《一時的な動作》と用いられ、《食物摂取》のカテゴリーの名詞は *have / take* どちらかと用いられると主張する。単一目的語をとる *give* は二重目的語をとる *give* と比較すると、《無意識的な反応》と《意識的な反応》のカテゴリーの名詞とより自由に共起すると主張する。

- (2) a. He gave a wretched sob.
b. She gave a small nod.

(2) では *sob* は《無意識的な反応》、*nod* は《意識的な反応》に属す名詞の例として挙げられている。<表 1>に示されるように、二重目的語をとる *give* が《無意識的な反応》に属す名詞と共起した例は 9 例であるのに対し、単一目的語をとる *give* がこのグループに属す名詞と共起した例は 27 例と非常に多いことがわかる。また、《意識的な反応》に属す名詞に関しても、二重目的語をとる *give* と共起した例は 11 例、単一目的語をとる *give* が共起した例は 20 例と多いことがわかる。

他方、Stein and Quirk (1991)^[2]は二重目的語をとる *give* は単一目的語をとる *give* と比較すると、《身体活動》と《接触活動》のカテゴリーの名詞とより自由に共起すると主張する。

- (3) a. Farthing gave his barrow a heave and moved

on.

- b. Jeanne... gave Polly a warm hug.

(3) では *heave* は《身体活動》、*hug* は《接触活動》に属す名詞の例として挙げられている。<表 1>に示されるように、二重目的語をとる *give* が《身体活動》に属す名詞と共起する例は 7 例であるのに対し、単一目的語をとる *give* がこのグループに属す名詞と共起する例はわずか 1 例である。また、二重目的語をとる *give* が《接触活動》に属す名詞と共起する例は 17 例であるのに対し、単一目的語をとる *give* がこのグループに属す名詞と共起する例はわずか 1 例と非常に少ないことがわかる。

さらに、Stein and Quirk (1991)^[2]は特に二重目的語をとる *give* は《知覚》のカテゴリーの名詞を伴い、ほとんどこのカテゴリーの名詞は単一目的語をとる *give* とは共起しないと主張する。<表 1>に示されるように、二重目的語をとる *give* が《知覚》のカテゴリーの名詞と共起した例は 84 例であるのに対し、単一目的語の場合にはわずか 3 例と大きく差が出た結果となっている。

2.2. 木原 (2008)

木原 (2008)^[3] は同族目的語構文と軽動詞構文の比較を行い、その中で軽動詞 *give* について分析を行っている。*give* は、直接目的語と間接目的語をとることが多いが、以下の動詞から派生した名詞が目的語に置かれる場合は、直接目的語だけでも容認されると主張する。

- (4) beam, chuckle, cough, cry, frown, giggle, grimace, grin, howl, laugh, sigh, smile, smirk, sneeze, sniff, snore, sob, weep, whistle, yawn (木原 2008: 36)

(4) に挙げられる動詞は、「人間が身体から何かを発する」意味を持つとし、木原 (2008)^[3]は、これらから派生した名詞は義務的に間接目的語をとらないと主張する。

- (5) a. Tom gave a smile.
b. Tom gave Mary a smile. (ibid.: 38)

(5) の *smile* は (4) に挙げられる動詞から派生しているため、(5a) のように直接目的語のみをとる場合も容認される。また、木原 (2008)^[3]は、(5b) の

ように間接目的語をとる場合も容認可能で、間接目的語は選択的になると主張する。

しかし、木原 (2008)^[3] は、(4) の動詞以外から派生した名詞や非動詞派生名詞を直接目的語にとる場合は、間接目的語が必要になると主張する。

- (6) a. #Tom gave a {life/death/song}.
b. #Tom gave a {book/ticket/cup}. (ibid.: 39)

木原(2008)^[3]は、(6) における *gave* の目的語の名詞は、(4) に挙げられる動詞から派生した名詞ではないため、(6) のように間接目的語を伴わない場合は容認度が下がると述べている。

木原 (2008)^[3] は、(4) から派生した名詞と共起するかどうかによって、*give* が間接目的語を義務的にとるかどうかが異なるとし、(4) から派生した名詞と共起する場合は、間接目的語は選択的になるとまとめている。

2.3. 評価

Stein and Quirk (1991)^[2]、木原 (2008)^[3]の両者は、単一目的語をとる *give* と二重目的語をとる *give* を区別して扱っている。そのため、それぞれの *give* の統語的な特徴が明確に記述されている点において成功している。また、Stein and Quirk (1991)^[2]は、軽動詞の目的語に置かれる名詞を意味分類し、それぞれの連語の傾向について、簡潔にまとめている。木原は、同族目的語構文の特性と *give* 構文を比較することによって、間接目的語を伴う義務性という新しい観点を導入している。

しかしながら、Stein and Quirk (1991)^[2]、木原 (2008)^[3]には短所も見られる。Stein and Quirk (1991)^[2]の<表 1>には、コーパス上に現れなかった名詞は”-“で示され、その意味グループに属す名詞は共起しないかのように表示されている。<表 1>を見ると、*have* と<身体接触>のグループに属す名詞や *monotrans. give* と<言語活動>のグループに属す名詞は、共起しないかのように見えるが、共起可能である。

- (7) You can *have a hug* and...
(The Corpus of Contemporary American English)

(7) における *hug* は、<表 1>の<身体接触>に分類される名詞であるが、<表 1>では Stein and

Quirk (1991)^[2]が利用したコーパスにデータがなかったため、”-“の表記となっている。また、以下の例文も容認可能であるにも関わらず、<表 1>には表示されていない。

- (8) I am going to *give a talk* at the Chamber of Commerce tonight. (新編英和活用大辞典^[4])

(8) における *talk* は、<表 1>の<言語活動>に分類される名詞であり、(8) は単一目的語をとる *give* と共起する例である。しかし、<表 1>では”-“の表記となっており、この連語は表示されていない。

Stein and Quirk (1991)^[2]の<表 1>の意味分類に関しては、主に 4 つの問題がある。まず 1 つ目は、<意識的な反応>は *shout, yell, cheer* などの意味を特徴づけられないということである。同じ言語的コミュニケーションを表す<言語活動>に属す *chat* や<潜在的に意識的な反応>に属す *laugh* との区別が明確でない。2 つ目は、<一時的な動作>は *try* の意味を特徴づけられないということである。*try* は「試み」の意味で、動作の意味を持たない語である。3 つ目は、<無意識的な反応>、<潜在的に意識的な反応>、<意識的な反応>の線引きが不明瞭であるということである。無意識的であるか、潜在的に意識していることか、意識的であるかということを検証し、弁別することは困難である。4 つ目は、<身体活動>の意味グループは、他の意味グループに属す<身体活動>を表す語を包摂し得るということである。*hug* は<接触活動>、*sip* は<食物摂取>に分類されているが、いずれも<身体活動>を表すため、分類基準が不明確である。

他方、木原 (2008)^[3] の場合、(4) の動詞から派生していない名詞の場合、義務的に間接目的語を要するとしている。しかし、*give* が間接目的語を伴わず、(4) 以外の動詞から派生した名詞と共起する場合もある。

- (9) Don't forget to *give a bow* when you leave.
(新編英和活用大辞典^[4])

(9) における *bow* は「人間が身体から何かを発する」意味を持つ名詞ではないが、間接目的語を挿入しない場合でも、容認される。そのため、(4) から派生していない名詞が義務的に間接目的語を要

するとは言えない。

Stein and Quirk (1991)^[2], 木原 (2008)^[3] の評価を以下に示す。

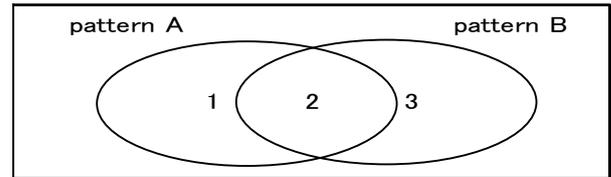
	長所	短所
Stein and Quirk (1991)	<ul style="list-style-type: none"> 単一目的語をとる <i>give</i> と二重目的語をとる <i>give</i> を区別し、分析を行っている。 目的語に置かれる名詞を意味分類し、それぞれの軽動詞の連語の違いについてまとめている。 	<ul style="list-style-type: none"> <表 1>には示されていないが、軽動詞と共に起する名詞が存在する。 <表 1>の「意識的な反応」は <i>shout, yell, cheer</i> の意味を特徴づけられない。 <表 1>の「一時的な動作」は <i>try</i> の意味を特徴づけられない。 <表 1>の「無意識的な反応」, 「潜在的に意識的な反応」, 「意識的な反応」の線引きが不明瞭である。 「身体活動」に属さない <i>hug, sip</i> などの語も「身体活動」を表す。
木原 (2008)	<ul style="list-style-type: none"> 単一目的語をとる <i>give</i> と二重目的語をとる <i>give</i> を区別し、分析を行っている。 間接目的語をとる義務性について分析を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> (4) から派生していない名詞でも、間接目的語を義務的にとらないものがある。

<表 2>

これまで述べてきたように、Stein and Quirk (1991)^[2], 木原 (2008)^[3] はそれぞれ利点があるものの、両者とも問題を孕んでおり、改善の余地があると考えられる。

3. ハイブリッド文法

ハイブリッド文法 (HG) は語と型からのアプローチの利点を組み合わせ、さらにコーパスのデータと母語話者の直観を採用した文法の枠組みである。HG のモデルは以下のように示される。



<図 1>

<図 1>における閉曲線の内部は、pattern A, pattern B をとることができる言語要素の集合を示す。<図 1>の 1 に属す言語要素は pattern A のみと統合的關係にあることを示し、3 に属す言語要素は pattern B のみと統合的關係にあることを示す。2 に属す言語要素は pattern A かつ pattern B と統合的關係にあることを示す。便宜上、ベン図内には数字を示す。その数字に対応する各領域に属す成員は、ベン図下の表に表示することで、複数の成員を明示的に示す。HG の枠組みは、母語話者の直観とコーパスデータの利点を兼務している点でも、ハイブリッドである。

HG を言語記述に利用する際の利点を以下に示す。

- (10) a. 語と型の両方を視覚的に捉えることができる。
- b. 重複した用法を記述できるため、余剰的な記述を避けることができる。
- c. コーパスから抽出される豊富なデータを使用することができる。
- d. 母語話者の直観による判定を導入することで、微妙な容認度の違いを表示できる。

ハイブリッド文法は母語話者による判定を利用するため、コーパスでは表示できない微妙な容認度の違いを表示できる。そのため、*have/give* の用法について、詳細な容認度の差異や共起語の分布の偏りなどを明確にすることができる。

4. 方法

今回の軽動詞 *have/give* についての調査では、話し言葉、書き言葉を含む約 4 億 5 千万語のアメリカ英語のサンプルを集積した The Corpus of Contemporary American English (COCA) を利用した。COCA はアメリカ英語が資料であるため、資料の判定はアメリカ英語の母語話者に依頼した。

軽動詞構文の範疇は研究者によって異なるが、

本稿では以下のような条件を満たす構文を軽動詞構文とし、分析を行った。

- (11) a. 軽動詞 + a / an + 名詞の文型で用いられる
- b. 目的語となる名詞は単音節である
- c. 対応する一語動詞で言い換えが可能である
- d. 主語が人間である

典型的な軽動詞構文は、目的語に不定冠詞を伴った単数、単音節の名詞が置かれる構文である。一方、名詞が定冠詞をとる場合や多音節の場合、目的語の名詞性は高くなり、名詞が持つ動詞性が低くなる。また、軽動詞構文で用いられる名詞は、ゼロ派生で対応する同形の動詞を持つため、同形の動詞によって言い換えが可能である。軽動詞構文は通例人を主語に置き、その活動について言及する構文である。したがって、無生物や動物を主語にとる場合は活動の可能範囲などが人とは異なるため、本稿では研究対象としない。また、*have* は単一の目的語しかとらないので、それと比較するため、*give* が二重目的語をとる軽動詞構文は、本稿の研究対象から除外する。

5. 意味分類

本稿では、Stein and Quirk (1991)^[2]の意味分類に大幅な修正を加え、事象名詞の意味分類を行った。意味グループの名称とそれぞれの特徴を以下の表に示す。

意味グループ	特徴	具体例
生理的活動	体の働き・機能などに関わる活動	sleep
知覚	見る、聴く、嗅ぐなどの活動	look
心的活動	こころに関する活動	think
言語活動	音声などによる言葉に関わる活動	chat
食物摂取	食べ物の消費に関わる活動	sip
身体ケア	身体のケアを目的とする活動	wash
接触活動	人や物と触れる活動	hug
移動運動	自ら体を動かし、変位・移動させる運動	swim
情緒的反応	感情の動きによって起こる反応	laugh

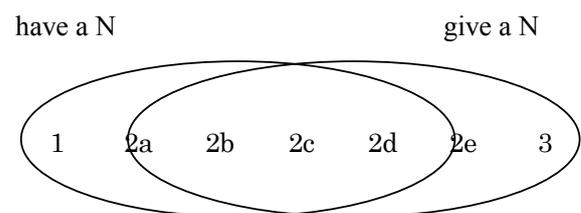
<表 3>

<表 1>に新たに追加した意味グループは「生理的活動」である。「生理的活動」には *sleep*, *nap*,

dream などが分類される。<表 1>の分類の場合、これらの事象名詞の意味に適合する意味グループがない。そのため、これらの事象名詞を包括する新たな意味グループ「生理的活動」を採用した。また、<表 1>では「意識的な反応」に分類される *shout* や *yell*, *cheer* は「言語活動」に属することとする。*shout*, *yell*, *cheer* などはいずれも声を発する活動であるため、声を発する言語コミュニケーションを表す *shout*, *yell*, *cheer* は *talk*, *chat* など同様に「言語活動」に分類される方が好ましいと考える。さらに、<表 1>の「一時的な動作」に属する *try* は心の動きに関する名詞であるため、「心的活動」に属するものとする。<表 1>の「無意識的な反応」、「潜在的に意識的な反応」、「意識的な反応」に関しては、<表 3>の「情緒的反応」に包括した。<表 1>の「身体活動」に関しては、他の意味グループに属する語も包摂するため、「移動運動」に改変した。「移動運動」は変位・移動をする運動であるため、他の意味グループに属する身体活動を表す語との識別が可能である。本稿では<表 3>の意味分類に基づき、*have* / *give* と共起する事象名詞について議論を進める。なお、この<表 3>の意味分類は暫定的なものであり、今後、修正される可能性がある。

6. 事例研究

今回観察された、*have* / *give* + a の型で共起する名詞を以下の図に示す。



	名詞	数
1	<i>dream</i> , <i>sleep</i> , <i>bite</i> , <i>drink</i> , <i>dose</i> , <i>ride</i> , <i>rest</i> , <i>smoke</i> , <i>stroll</i> , <i>swim</i> , <i>walk</i> , <i>jump</i>	12
2	a <i>cough</i> , <i>grin</i> , <i>smile</i> , <i>touch</i> , <i>check</i> , <i>wash</i> , <i>nap</i> , <i>sip</i> , <i>taste</i> , <i>trek</i> , <i>whiff</i> , <i>nod</i> , <i>groan</i> , <i>play</i> , <i>drive</i>	15
	b <i>chat</i> , <i>laugh</i> , <i>guess</i> , <i>piss</i> , <i>smell</i> , <i>sniff</i> , <i>vote</i> , <i>yelp</i> , <i>yank</i> , <i>fight</i>	10
	c <i>kiss</i> , <i>talk</i> , <i>yell</i> , <i>shout</i> , <i>hug</i> , <i>show</i> , <i>tug</i> , <i>cry</i> , <i>glance</i> , <i>look</i> , <i>sigh</i> , <i>puff</i> , <i>try</i>	13
	d <i>wink</i> , <i>cheer</i> , <i>grasp</i> , <i>shrug</i> , <i>flick</i>	5
	e <i>shove</i>	1
3	<i>bow</i>	1

<図 2>

本稿では、〈図2〉の1,3の領域を「非重複領域」、2の領域を「重複領域」と呼び、議論を進める。1に示される語は、*have a* との共起が完全に容認されるが、*give a* との共起は許容されない名詞である。2に示される語は *have/give a* 両方との共起が容認される名詞である。2はさらに細分化され、重複部分の中央に位置する 2c は両方との共起が完全に容認される名詞、2b, 2d にはどちらかの容認度がやや下がる名詞、曲線上に示される 2a, 2e には、どちらかの容認度が非常に低い名詞が属す。2に示される「重複領域」は5つの程度に分類される。

〈図2〉が示すように、*have* との共起が完全に容認される名詞の数は50と非常に多い。他方、*give* との共起が完全に容認される名詞の数は20と、*have* と比較すると半分以下の数である。また、*have* との共起が容認されない名詞の数は1つだけであるのに対し、*give* との共起が容認されない名詞の数は12と非常に多い。これらのことから、*have* は *give* と比較すると、適用範囲が広いことが分かる。

木原 (2008)^[1] は (4) から派生していない名詞は義務的に間接目的語をとると述べていたが、〈図2〉の2c-e, 3に示される *kiss, talk, yell, hug, show, tug, glance, look, puff, try, wink, cheer, grasp, shrug, flick, shove, bow* は間接目的語なしに、*give* との共起が完全に容認された。この結果からも、(4) から派生した名詞かどうかによって *give* の間接目的語の義務性は左右されないとと言える。

さらに、Stein and Quirk (1991)^[2] は単一目的語をとる *give* は視覚を表わす名詞とはほとんど共起しないとしているが、〈図2〉の2cにあるように、視覚を表わす *glance* と *look* は単一目的語をとる *give* との共起が完全に認められている。従って、単一目的語をとる *give* は視覚を表わす名詞とほとんど用いられないとは言えない。

6.1. 非重複領域

6.1.1. have

give との共起が容認されず、*have* との共起のみが容認された名詞には、〈生理的活動〉、〈食物摂取〉、〈移動運動〉に属す名詞が多く見られた。〈生理的活動〉に属す名詞には *sleep, dream, rest*、〈食物摂取〉に属す名詞には *bite, drink*、〈移動運

動〉に属す名詞には *walk, jump, stroll, swim* がある。これらの名詞が *give* と共起しなかった理由としては、経験を所有するという意味での *have* とは意味が合うが、*give* の誰かに何かを与える意味とは合わないため、共起が容認されなかったものと考えられる。

6.1.2. give

have との共起が容認されず、*give* との共起のみが容認された名詞は *bow* のみであった。本来、*give* は意思を持って何かを誰かに移動させることを意味するため、〈情緒的反応〉である *bow* との共起が完全に容認されたものと考えられる。他方、*have* は本来所有することを意味するため、*bow* との意味が合致せず、共起が容認されなかったものと考えられる。

6.2. 重複

6.2.1. have / ?give a N

have との共起は許容されるが、*give* と共起する場合、容認度がかなり低い名詞には、〈生理的活動〉、〈食物摂取〉、〈情緒的反応〉に属す名詞が多く見られた。

〈生理的活動〉に属す名詞には *nap*、〈食物摂取〉に属す名詞には、*sip, taste, whiff* がある。〈生理的活動〉と〈食物摂取〉に属す名詞は *give* と用いられる場合、容認度がかなり低くなるか、容認されないかのどちらかで、*give* とはほとんど用いることができないことが分かる。これらの名詞は、他者へ向けた活動ではないため、*give* と用いられる場合に容認度が非常に低くなったものと考えられる。

〈情緒的反応〉に属す名詞には *smile, grin* がある。表情と顔は密接な関係にあるため、所有を表わす *have* との共起が容認されたものと考えられる。

6.2.2. have / ?give a N

have との共起は許容されるが、*give* と共起する場合、容認度が少し低くなる名詞には、〈知覚〉と〈言語活動〉に属す名詞が多く見られた。〈知覚〉のグループの *smell, sniff* は、*give* との共起とする場合の容認度がやや低くなり、*give* との共起が完全に認められなかった。これらの名詞は外に対する活動を表さないため、情報発信型の *give* と共起する場合、容認度が下がったものと考えられ

る。

《言語活動》に属す名詞には *chat, yelp* がある。*laugh* は、*laugh* と同様に《情緒的反応》に属す *smile, grin* よりも容認度が若干高くなる結果となった。*give* は相沢 (1999)^[5]によると瞬間的な動作を意味する。例えば、*have a laugh* は継続的に「あはは」と笑う意味だが、*give a laugh* は瞬間的に一度笑い声をあげるという意味となる。そのため、より状態的な *smile, grin* よりも、*laugh* の方がより容認度が高くなったものと考えられる。

6.2.3. have / give a N

have / give 両方との共起が完全に認められる名詞には、《言語活動》と《知覚》を表わす名詞が多く見られる。《言語活動》に属す名詞には *talk, yell, cheer, shout* がある。しかし、*give* と用いられる場合には、一方的な意味が強くなる。

(12) a. May I *have a talk* with you now?

(ランダムハウス英和大辞典^[6])

b. *give a talk* to the students on the “Women’s Lib” movement.

(新英和大辞典^[7])

have と共起する (12a) の場合、一緒に話をするという意味になり、相互に話をするを表わす。一方で、*give* と共起する(12b) の場合、公演をするという意味になり、一方的に話をしていることを表わす。同じ *talk* を目的語に置く場合でも、共起する軽動詞によって意味が少し異なる。

《知覚》に属す名詞には *look, glance* がある。*give* と共起する場合、他者や物へ視線を送る意味で、*give* の字義的な意味と合致するため、共起が認められるものと考えられる。

6.2.4. ?have / give a N

give との共起は許容されるが、*have* と共起する場合、容認度が少し低くなる名詞は《情緒的反応》を表す *wink, shrug*、《接触活動》を表す *flick, grasp*、《言語活動》を表す *cheer* のみであった。*wink, shrug* は他者への感情を伝達する活動であるため、他者への働きかけを意味する *give* との共起が認められたものと考えられる。*have* の場合は、他者に対する活動ではなく、経験としての所有という意味を持つため、容認度が少し下がったもの

と考えられる。また、*give* は瞬間的な活動を表すため、*flick* と共起した場合の容認度が *have* と比べると高くなったと考えられる。*give a flick* はここでは「軽く打つ」という《接触活動》の意味で用いられている。

(13) ..., Shannon ?*had / gave a flick* of the reins.

新英和大辞典^[7]では *flick* は「ぱらぱらめくる」という意味で *have* と共起するとされているが、今回の調査ではこの例は発見されなかった。

6.2.5. ??have / give a N

have と共起する場合、容認度が非常に低くなる名詞は《接触活動》を意味する *shove* のみであった。*give* は *have* と比較すると瞬間的な活動を意味するため、強く速く押すことを意味する *shove* との共起が容認されたものと考えられる。*have* は継続した状態の所有を意味するため、*shove* と用いられた場合、容認度が非常に低くなったものと思われる。

7. まとめと展望

これまで議論してきた *have / give* との共起が容認された事象名詞が属す主な意味グループと典型的事例を以下に示す。

	意味グループ	典型的事例
have	《生理的活動》	sleep
	《食物摂取》	drink
	《移動運動》	swim
	《心的活動》	guess
	《身体ケア》	wash
have / give	《知覚》	look
	《言語活動》	shout
give	《接触活動》	shove

<表 4>

<表 4>からわかるように、*have* は意志を持って行わない《生理的活動》に属す多くの事象名詞と用いられる。他方 *give* は意志を持って行う《接触活動》に属す多くの事象名詞と用いられる。軽動詞自体の意味に関して言えば、*have* は自身の経験

として、後続する事象名詞が示す活動の所有を表す。他方、*give* は自身で完結できる活動というよりは、自分以外の人や物を巻き込む、外に向けた活動を表す。また、<表 4>に示されるように、*have* のみと共起することができる事象名詞の種類は多岐に渡り、*give* と比較すると非常に多く、*have* の適応範囲は広いことが分かる。《情緒的反応》は、*give* との共起が完全に容認される非重複領域から、*have* との共起は完全に認められるが *give* との共起は容認度がかなり下がる重複領域まで幅広く用いられたため、*have/give* と共起した主な意味グループとして<表 4>に表示していない。

<表 1>と比較すると、Stein and Quirk (1991)^[2] の調査では *have* と《接触活動》に属す名詞と共起する例が発見されなかったが、今回の調査では *have* と《接触活動》に属す *kiss, hug* との連語が容認された。単一目的語をとる *give* と《心的活動》、《食物摂取》、《身体ケア》に属す名詞との共起については、Stein and Quirk (1991)^[2]と同様に、完全に容認される連語は発見されなかった。しかし、<表 1>の《一時的な動作》と《言語活動》については、Stein and Quirk (1991)^[2]は発見されなかったとしているが、今回の調査では単一目的語をとる *give* と《一時的な動作》に属す *try*、《言語活動》に属す *talk* などとの共起が完全に認められた。

<表 3>を用いることで、<表 1>にはない《生理的活動》を表す *sleep, nap, dream* などの *have* と共起する名詞を表示することができる。また、《移動運動》を取り入れたことによって、他の身体運動を表す語との区別を明確にし、*jump, walk, swim* など *have* と典型的に共起する名詞を統括することができた。<表 3>は *have/give* と共起する意味グループの傾向を表示するのに有用である。

勝部 (2014)^[1] においては *have/take* について、本稿においては *have/give* について議論を進めてきた。今後の課題は以下の通りである。

- (14) a. 事象名詞の意味分類モデルを構築する。
- b. *give/take* についても比較を行い、共起関係や意味について研究を進める。
- c. 軽動詞構文に対応する一語動詞を用いた構文やイディオムとの比較を行う。
- d. 相と動詞の関係についての分析を進める。
- e. 軽動詞構文に挿入される形容詞について分析を進める。

謝辞

本稿は勝部 (2014)^[1] に一部基づいている。研究を遂行するにあたって、多大なるご指導・ご支援を賜った指導教員の村上丘教授、データの判定をして下さった George Berninger 氏には、深く感謝を申し上げます。本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所大学院生研究助成 (DA2607) の助成を受けたものです。

付録

		examples			
1		(1) They <i>have</i> / * <i>give</i> a bite. (2) They <i>had</i> / * <i>gave</i> a drink. (3) Here, <i>have</i> / * <i>give</i> a dose of this anti-fat and get thin again (4) We now <i>have</i> / * <i>give</i> a ride. (5) She <i>has</i> / * <i>gives</i> a rest and after that,... (6) I <i>had</i> / * <i>gave</i> a smoke in a sandbox,... (7) He <i>had</i> / * <i>gave</i> a stroll in the public garden. (8) I often <i>have</i> / * <i>give</i> a swim in the morning. (9) A guy <i>has</i> / * <i>gives</i> a walk in the park,... (10) I <i>had</i> / * <i>gave</i> a dream about my father recently. (11) I need to <i>have</i> / * <i>give</i> a sleep,... (12) He <i>had</i> / * <i>gave</i> a jump and went off very fast.			
	2	a	(1) She <i>has</i> / ?? <i>gives</i> a cough. (2) She <i>has</i> / ?? <i>gives</i> a grin. (3) Dosk <i>has</i> / ?? <i>gives</i> a smile. (4) Let's <i>have</i> / ?? <i>give</i> a check of the weather. (5) You better <i>have</i> / ?? <i>give</i> a wash, Jake," Luke said. (6) He <i>had</i> / ?? <i>gave</i> a nap. (7) I <i>had</i> / ?? <i>gave</i> a sip of coffee. (8) I <i>had</i> / ?? <i>gave</i> a taste,... (9) <i>Have</i> / ?? <i>Give</i> a trek through the jungles of Borneo,... (10) Talon <i>had</i> / ?? <i>gave</i> a whiff of his coffee,... (11) Most doctors stay home when they <i>have</i> / ?? <i>give</i> a touch of something,... (12) Pete <i>has</i> / ?? <i>gives</i> a nod,... (13) The audience <i>had</i> / ?? <i>gave</i> a groan,... (14) ...; the summer I <i>had</i> / ?? <i>gave</i> a play in my backyard. (15) My three kids and I <i>have</i> / ?? <i>give</i> a drive,...		
			b	(1) <i>Have</i> / ? <i>Give</i> a chat with your dad. (2) They <i>have</i> / ? <i>give</i> a laugh. (3) They <i>have</i> / ? <i>give</i> a guess,... (4) I said, do you know where I can <i>have</i> / ? <i>give</i> a piss. (5) He <i>had</i> / ? <i>gave</i> a smell of the rose. (6) She <i>had</i> / ? <i>gave</i> a sniff,... (7) We're going to <i>have</i> / ? <i>give</i> a vote. (8) He <i>had</i> / ? <i>gave</i> a fight with his family. (9) She <i>had</i> / ? <i>gave</i> a yelp of surprise and panic. (10) He <i>had</i> / ? <i>gave</i> a yank and held it up for all to see.	
				c	(1) I <i>have</i> / <i>give</i> a glance. (2) I'd rather <i>have</i> / <i>give</i> a kiss.

	(3) In the morning, we <i>had / give a talk</i> . (4) They <i>had / gave a yell</i> for each of their players. (5) <i>Have / Give a cry</i> and get it out of your system. (6) I <i>had / give a look</i> at it,...
	(7) My father <i>had / gave a puff</i> on his cigarette and watched the ash grow longer. (8) ..., and I <i>had / gave a sigh</i> of relief. (9) Let me <i>have / give a try</i> . (10) You can <i>have / give a hug</i> and... (11) We are not <i>having / giving a show</i> while we're doing the songs,...
	(12) She <i>had / gave a tug</i> , and the lock sprang open. (13) Just <i>have / give a shout</i> when you're done.
d	(1) So we each <i>?had / gave a grasp</i> of the strap on his life jacket and held him back. (2) Edgar <i>?had / gave a shrug</i> . (3) And he <i>?has / give a wink</i> ,...
	(4) Outside the crowd <i>?had / give a cheer</i> to someone speaking patriotically. (5) ..., Shannon <i>?had / gave a flick</i> of the reins
e	Jaycee <i>??has / gives a shove</i> to the old man and...
3	He <i>*had / gave a bow</i> to the audience.

- [2] Stein, G. and R. Quirk. "On having a look in a corpus." *English Corpus Linguistics*. Longman. 1991. pp.197-203.
- [3] 木原恵美子. 同族目的語構文の認知構造: 軽動詞構文との比較を通じて. 言葉と認知のメカニズム: 山梨正明教授還暦記念論文集. 2008. pp.31-45.
- [4] 市川繁治郎他. 新編英和活用大辞典. 研究社. 2005.
- [5] 相沢佳子. 英語基本動詞の豊かな世界. 開拓社. 1999.
- [6] 國廣哲彌. ランダムハウス英和大辞典第二版. 小学館. 1993.
- [7] 竹林滋. 新英和大辞典第六版. 研究社. 2002.

コーパス

- [8] *The Corpus of Contemporary American English*. <http://corpus.byu.edu/coca/>, (accessed 2013-09-28).

引用文献

- [1] 勝部愛美. ハイブリッド文法—軽動詞 *have / take* の事例. 人間生活文化研究. No. 24. 2014. pp.181-194.

Abstract

There are two predominant ways to describe sentence structures: from words and from patterns. I attempt to advocate *hybrid grammar* which is a combination between the advantage of word grammar and that of pattern grammar. Furthermore, *hybrid grammar* is a blend of the advantage of corpora and that of native speaker's intuition. In my previous paper, I applied *hybrid grammar* to *the light verbs have and take* in order to exemplify that hybrid grammar is useful for description of sentence structures. In this paper, I insist that *hybrid grammar* reveals the features of *event nouns* which follow the light verbs *have and take*.

(受付日 : 2015 年 7 月 6 日, 受理日 : 2015 年 7 月 15 日)

勝部 愛美 (かつべ まなみ)

現職 : 大妻女子大学非常勤講師

大妻女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程単位取得退学

専門は英語学. 現在は主に英語の軽動詞構文に焦点をあて, 研究を行っている.

主な論文 : ハイブリッド文法の構築へ向けて (『大妻レビュー』第 47 号)